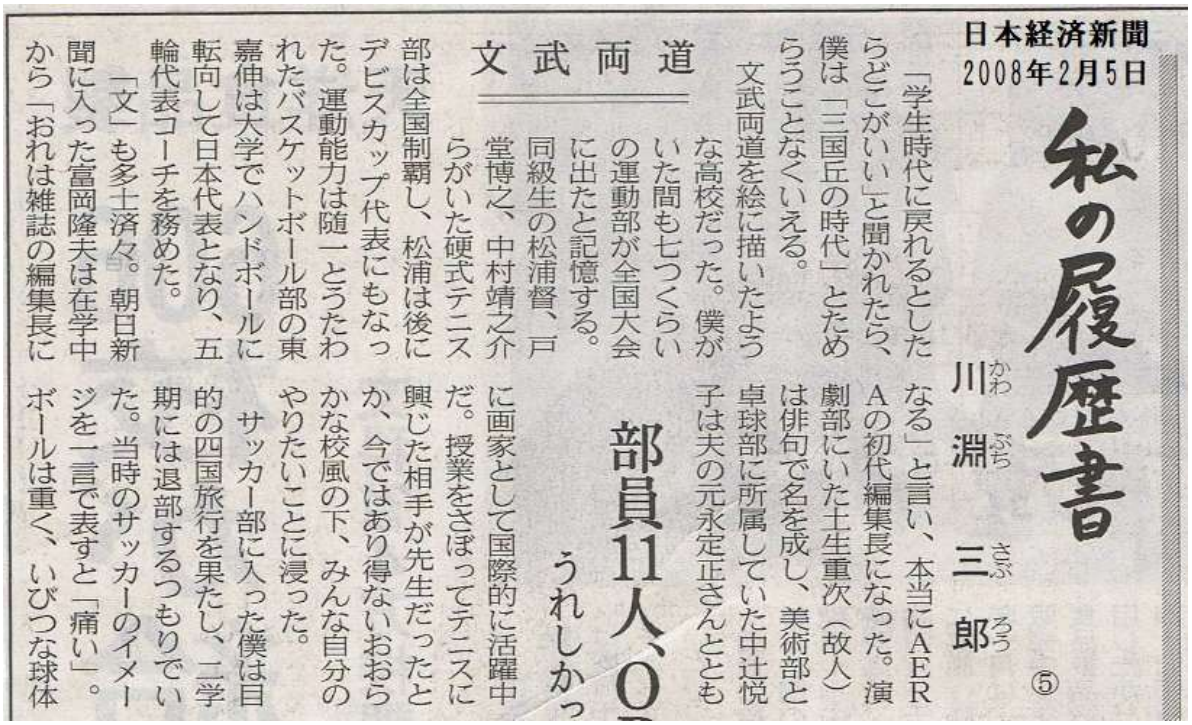
思い出すこと、そして自分への期待

西村敏治

川淵三郎君が「学生時代に戻れるとしたら、三国丘の時代！」と、「私の履歴書」に語られていたのには少々驚いた。彼ほど社会的にも大きく活躍し、広く華やかな立場も経験している人が・・・と。



日本経済新聞
2008年2月5日

私の履歴書

川淵三郎 ⑤

「学生時代に戻れるとしたらどこがいい」と聞かれたら、僕は「三国丘の時代」とためらうことなくいえる。

文武両道を絵に描いたような高校だった。僕がいた間も七つくらいの運動部が全国大会に出たと記憶する。同級生の松浦督、戸堂博之、中村靖之介らがいた硬式テニス部は全国制覇し、松浦は後にデビスカップ代表にもなった。運動能力は随一とうたわれたバスケットボール部の東嘉伸は大学でハンドボールに転向して日本代表となり、五輪代表コーチを務めた。

「文」も多士済々。朝日新聞に入った富岡隆夫は在学中から「おれは雑誌の編集長になる」と言い、本当にAERAの初代編集長になった。演劇部にいた土生重次（故人）は俳句で名を成し、美術部と卓球部に所属していた中辻悦子は夫の元永定正さんとともに画家として国際的に活躍中だ。授業をさぼってテニスに興じた相手が先生だったとか、今ではあり得ないおおらかな校風の下、みんな自分のやりたいことに浸った。

サッカー部に入った僕は目的の四国旅行を果たし、二学期には退部するつもりでいた。当時のサッカーのイメージを一言で表すと「痛い」。ボールは重く、いびつな球体

文武両道

部員11人、O

うれしかっ

当時、三国丘高校のグランドは、サッカー、ハンドボール、野球の３部が共用していた。グランドの表面の砂土は薄く、小石がゴロゴロしていて、風が吹いた後や雨上がり後の晴れた日は、ヤスリのような荒々しい表面となり、練習中に転んだり滑ったりすると、必ず膝や太ももにビフテキまがいの傷ができるひどい状況であった。私は、高校時代ハンドボール練習で傷の絶えない毎日だった。

川淵君のサッカー歴で、物理的な環境でいえば、必ずしも恵まれているとは言えなかったが、青春時代の「夢」、「憧れ」、「級友」、「先輩・後輩」等々心情的には忘れがたい思い出が詰まっていたのではと察している。

三国丘高校３年間の生活は短く、知りあえた級友はそれほど多くはなかったように思われたが、卒業後には、新たなめぐり逢いに恵まれ、同窓同期として絆を感じ、太く、強く結ばれていることを思い知ることとなった。

還暦を過ぎて、小川誠二郎君に俳句会に誘われ、まさかと思いながら、ごく日常の生活を詠い、添削指導を受け、作句への思いに励まされるまでになった。

その時々の俳句会の「兼題」に取り組む中、時として三国丘高時代に戻り思い出を表現することもあった。それが、作句本来の姿であるのかどうかは分からないが、思いに素直に従うことにした。

吟行「空中観桜会」 主催者（西村敏治）歓迎の挨拶
大阪歯科大学病院 14 階特別室⇒レストラン「PLAZA14」

兼題の５句を作句して、投句後の選句の中で、「特選句」に選ばれるのは、嬉しく励みとなっている。

金剛俳句会や、それに引き継がれたアカシア俳句会への参加など新たな体験の中で味わうエトランゼの気分を楽しみながら、「三国丘」の魅力に引かれている自分に期待している。